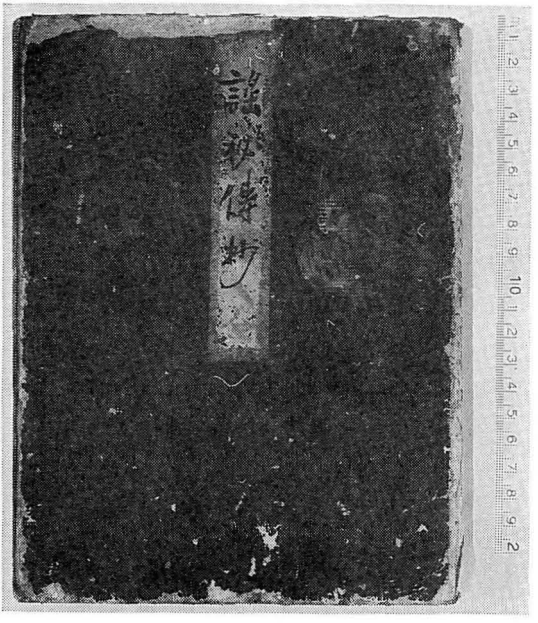
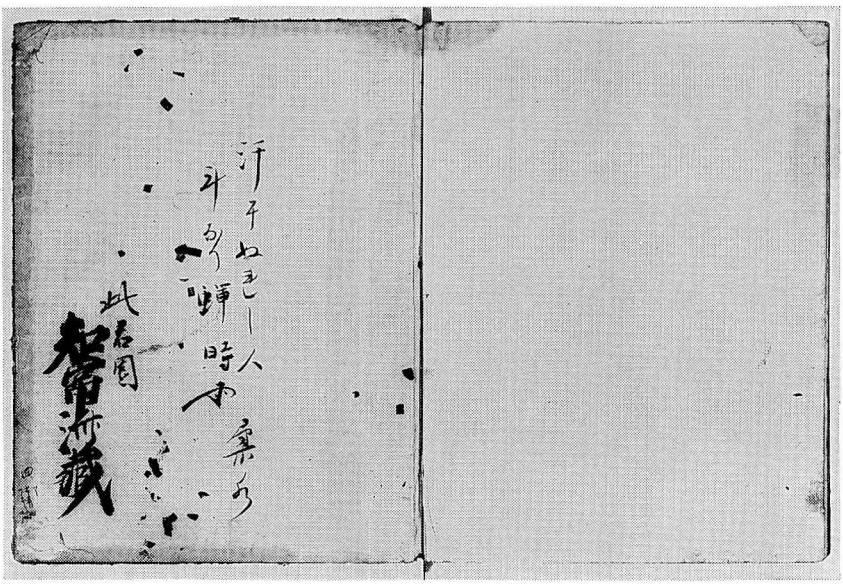
調査報告　四十一

山岸文庫蔵『謡秘伝抄』翻刻

山本　和加子





凡例

一、一ッ書きの各条ごとに便宜上通し番号を付したが、見出しや改行により段落の設けられているものにも番号を付けた。

一、句読点を補い、謡曲本文の引用部分は「　」で囲み、曲名は〈　〉で補った。

一、漢字の異体字や旧字体は、通行の字体や新字体に改めることを原則としたが、「哥・萬」等底本のままのものもある。

一、文字遣い・清濁・振り仮名等の諸記号は、底本のままとした。但、ミセケチ等はこれを省き、訂正後の本文の方を選んだ。

一、平仮名と片仮名の区別は底本のままとしたが、「リ・ツ」等の区別は適宜判断して定めた。又、「ゟ」は「より」に改めた。

一、底本では助詞等を小字で記すこともあるが、すべて他の同一の大きさとして区別しなかった。

一、謡曲の引用等に施されている節付は、煩雑になるので省略した。

一、校訂者の注は、行間に（　）で示した。

（内題）
秘　密　傳

1

先、さし寄て、誰も御謡大事の物と申侍り候。ひとふしも御謡候方様ハ、謡も可有と思召候時ハ前方よりうたふへきを心にかけ、所望の時、其儘御謡候事、専一にて候。其上、春ならは春の事を作りたる小謡を何ニ而も心を祝言に謡ふへし。祝言といふハこころをはりて、正しくすくに軽ク、吟つよく、物を略せさるか祝言にて候。若、其時に至て、其季の小うたひを心に出さる時ハ、関寺小町に「さゝ浪や浜の真砂ハ」といふ所を祝言に謡ふへし。是、四季ともに不苦候。小謡一ツ、其心を諷候へハ跡ハ何にても不苦候。しゆあミか（音）哥（阿弥カ）に、

2

へうたわんにまつ祝言をもつはらに扨其後ハ恋暮（ママ）哀傷。扨、小うたひハ序より謡候が能候。序ト申ハ一へ音信（高砂）は松に事問」と云所ニて候。かやうの所ハ、何れの小謡の前ニも御入候。序より諷候へハ、必小謡を返し候て謡物ニ而候。又序なくとも、初謡候小うたひは、返し候て謡ふ物にて候。ことたらぬハ不祝言ニ候。数多謡候時ハ、かへさずニ謡候てよく候。夫も一人にうたひ出させ可有候。聟取の時は、かへし不申候。門出おくりの時ハ返し申候。船に乗候て、余処へ行時ハ、かへさぬ物ニて候。萬、此こころにて候。観世宗節、新宅の能ニ杜若を被致候時、「へ信濃なる浅間の嶽に立雲（ママ）」ト上られ候。是ニ而御心得可有候。初たる所へ行て謡ならは、其主人の名乗・ミやうし等問ふへし。指合をうたふましき心得なり。

3

一、座敷の作り様ニ而陰陽の心得、専一ニ候。西北ハ陰なるにより、此方へ向たる坐敷ならハ、謡かろく、吟も強ク、めらぬ様ニ謡ふへし。南東ハ陽なる間、少おもく、吟もめり候てうたふへし。陰ニハ陽を以て也。陽ニハ陰を以テす。是、陰陽・和合なり。惣別、謡の位、時により方角ニより申候間、軽キ物にても重キ物ニもかきり不申候。

4

一、それ〳〵の位によりて替へし。老若・男女・僧俗にあり。

5

一、四季の調子。春ハ双調（木）。夏ハ黄鐘（火）。秋ハ平調（金）。冬ハ盤渉（水）。土用ハ一越（土）。

6

一、月の調子。正月、平調。二月、勝絶。三月、下無。四月、雙調。五月、鳧鐘。六月、黄鐘。七月、鸞鐘（ママ）。八月、盤渉。九月、神仙。十月、上無。十一月、一越。十二月、断金。十二時モ同事。寅ノ時を則、平調ニ当候て、其より次第〳〵也。夫、調子ハ両調子兼而心得、其外色〻候へ共、少〻心懸候分ニ而は中〳〵難成事ニ候。其上、いかに月の調子なればとて、神仙・上無なとニ而ハ声出不申候テ、不叶事ニて候。広き座敷ニ而ハすこし調子高ク、せはき所にてハ少ひきく御謡候心

得、尤ニ候。哥ニ、
謡んに調子をひきく吟しつゝ短き事を先謡ふへし。
さし寄て謡ふ調子はさうてうか後ハわうしきはんしきもよし。

7 常ニ御嗜可有事。

8 一、目をふさき謡ふ事。
9 一、人をしかる様ニうたふ事。
10 一、手すさみをする事。
11 一、文字を聞えぬ様ニ謡ふ事。
12 一、拍子を高クとる事。
13 一、きやうこつニ声ヲ太ク細ク謡ふ事。
14 一、頭をふり、浮沈、面白からしてうたふ事。
15 一、貴人御盃之内、長き小謡うたふ事。
16 一、謡一番の内、前の小謡を後うたひ、後の小謡を前ニ謡ふ事。

17 身のうへにおほへハくせもよもあらし常に鏡に向ひても見よ。
はれの時前に稽古をよくなしてその期はゆふ〳〵とも て。
稽古をハはれにするそと思ひなしはれをハ常の心なるへし。

18 凡、謡は胴より声を出し、ほかミに心を置、下心をはりて上かわを何となく謡候か能候。又、はりつけとて腹をはり、おとかいをのどへ付、下はを上はより出し、舌を下へ付而謡ふへしと、かやうニ諷候へハ必くびより上ニ心あつく(てカ)、口のはた、頭より声出候て鼻へ入わ(ママ)けきこえず、聞にくき物にて候。
音曲ハたゝ大竹のことくにて直クに清くてふしすくなかれ。
よき音曲と申ハ謡の面、する〳〵としてかる〳〵と、上ハふしもなきやうに聞て底にふし籠て、延ちゝめ沢山にて、其境、耳に立候ハぬやうニうたひ候物と申伝候。

19 逢坂の関の清水に影見へて今や引らん望月の駒。
初の一首ハ、何のふしもなけれとも、幾度吟候へ共、口にもあたらす、耳にも立候ハてその感ふかし。後一首ハ打聞所ハおもしろきやうニ候得とも、数返吟し候へハ、口にこわく当り、清水の哥ニハ無下におとり候と古人も申置候。音曲も清水の哥、やすらかにたけ高ク、耳ニ立候はぬ様ニあらまほしく候。花・紅葉なと見事成物ハなく候へ共、木つきかしけ、枝ふりもあしく候へハ見られ不申候。殊更、諷は御慰物(ナグサミ)ニて候間、くせなく聞能やうニ御嗜、尤ニ候。昔より声を忘れて曲をしれ、曲を忘れて拍子をしれと申候。謡さへうたひ候へハ、声ハ独り出候て聞能候。努〻声を能出し候ハんと、声に心を御付有間敷候。したるきも謡の自由になきも、皆、声に心付申候故ニ而候。又ふしばかり心を付、師匠のことく少もちかへじと皆御諷候。必あ

しく、すゝみかたくなる物ニて候。たとへハ、名有墨跡なとを上ゝに紙なとこしらへをして、少も違ぬやうニすき写に仕候へとも、同し心ニハ用ひ不申候。ふしは四座共ニ違ひ候得共、何にても謡様知たる人を上手と申候。

20一、当坐の花・ついの花といふ事。

おもふにハ時の花のミかさしつゝついの花をハ打わするらん。

皆人毎にうたひを忘れすに覚美しく、拍子にあい、声さへ出候へハ、はや此上ハ有ましきと思召候て自慢(シマン)し、人もゆるさぬ上手に御なり候。右のことく謡候へハ、大方はよきやうニ候へ共、中〳〵上手とハ不被申候。当坐の花にてあしく候。よく拍子ニ相候ハヽ、皆したるき位ニ而嫌申候。拍子の間より謡出候ほとより、拍子ニ移り合てあハぬ心持、是、程ひやうしとて、かろき能音曲ニ仕候。此心をうたひ候ハんと存候得は、昔より古人の申置候ならひとも能ゝ稽古候て、其心をふまへて如何様ニもあたらしく御謡候事、是、対の花ニ而興有。聞さめなく候。論語ニ、古を尋て新を知れと云ひなすへし。謡ひやうの合点を能被成候而、御謡肝要ニ而候。合点まいらぬ間ハ、我稽古の悪敷を覚ぬものニ而候。能ゝ御分別にて御謡肝要ニ而候。萬、此心ニて候。哥ニ、

声出す小音なりと音曲を習ひてうたふ人そ床しき。

21　出ぬより猶つる声の音曲のよこしまなるそせうし成ける。

いかに何となくさらりと謡候。(か、脱カ)よきとて人にも謡手とよばれ、功者なるものゝ幾度諷も何事なく同し事斗ニてハ、其全(ママ)なき物にて候。一番の内ニ而ハ、一所も二所も珍敷ふしなと御うたひ有へく候。左様ニ候得は、一廉聞事ニ覚候物にて候。古人の諷置候珍敷ふし、いかほとも御覚候て、時〳〵御謡有へく候。左様ニ候へハめつらしきふし沢山ニハ、かまへて〳〵御謡ひ有ましく候。さい〳〵諷候へハ、めつらしくなく候。初心の人なとハ、一ふしも御無用ニ候。大事のふしハ、眉見(ママ)へこゝろをやりてうたふへし。

22一、たけくらへ。〈蟻通〉秋のせミの吟の声。

23一、三ノのゝ事。〈楊貴妃〉りつきうのふんたいの顔色の。

24一、三字あかり。〈三井寺〉浮ねに替る此うミハ。

25一、三字下り。〈小塩〉花見車くるゝより。

26一、三引。〈芭蕉〉春にあふ事。

27一、二字落。〈皇帝〉たくひなきひニかく。

28一、一字おとし。〈紅葉狩〉むかへハかハる心かな。

29一、三重落。〈関寺小町〉老の身のよわり。

30一、ふしなまり。〈熊野〉清水寺の鐘の声。

31一、片おとし。〈天鼓〉初て望老の身の。

32一、文字なまり。〈柏崎〉こかねの岸に至るへし。

33 一、前おとし。夜あらしにねもせぬ。〈二人静〉

34 一、片くり。大ゑきのふようの紅。〈楊貴妃〉

35 一、向くり。あいしうのこゝろ。〈江口〉

36 一、くる事。まさきのかつら。〈大原御幸〉

37 一、二字くり。たゝゆめの世と。〈野宮〉

38 一、ひろふ。定家かつら。〈定家〉

39 一、いるゝ。月雪の。〈江口?〉

40 一、よする。まくらをならへし。〈江口〉

41 一、はこふ。草はう〳〵としてたゝ。〈隅田川〉

42 一、ロヲ切、心を不切所。又有時ハ声をきゝ。〈江口〉

43 一、心ヲ切、ロヲ不切所。春過夏たけ秋くる。〈芭蕉〉

44 一、ロモ心モ切所。哀に消し浮身也哀。〈松風〉

45 一、文字ヲしやうニうたふ事。もとめゑたくそ。〈錦木〉

46 一、しやうを文字ニうたふ事。ほうそう雨滴てなれし。〈三井寺〉

47 一、縮メテ拍子ニ合候ふし。たけの都ちに。〈野宮〉

48 一、延て拍子ニ合候ふし。来て鳴く声を聞ハ。〈白楽天〉

49 右、此ふしハ鼓をはやす謡様にて候。少違候て候ニより、謡も鼓も覚すニ拍子ニ違候所ニて候を謡より合申候。かやうの所、諷毎に御入候心、同前。宮増弥左ヱ門、哥ニ、

年ふれハ替る事のミ多き中に鼓をはやすうたひてもかな。

鼓をハ打テハはやすと思ふらん心をやりてうつハまれなり。

50 一、文字のしやうちかふとハ、みえぬ(アシ、ナマル)。たへぬ(ナマル)ョシ。見へぬ(ナマル)ョシ。

51 一、しやうクの習の事。

平声　上声　去声　入声

ちや　わん　てん　もく

(月なミ)頭　(人ニ物を問)　(弓をまく)藤　とつ

52 一、宮　商　角　徵　羽

(すく)一　(そる)〜　(すくむ)〜　(ゆる)一

木の下陰。国も治る。松に事問音信ハ。所ハ高砂。

53 一、口中開口の事。

口をすほむ。舌を出し、口を中にひらく。はなをかミ、口をほそむ。はなをかミ、唇をひらく、はも唇もひらく。

54 一、あいうゑを　鼻喉ニ通ス。

55 一、かきくけこ　鼻ニ通ス。

56 一、さしすせそ　歯ト舌ニ通。

57 一、たちつてと　あきとに通ス。

58 一、なにぬねの　鼻トアキトニ通。

59 一、はひふへほ　唇あわせす。

60 一、まミむめも　唇あふ。

61 一、やいゆへよ　鼻より出ル。

62 一、らりるれろ　舌をふる。
63 一、わいうゑを　鼻喉ニ通。
64 一、呂律（りょはりつはふとくさかる。）　横竪（わうはよこ。しゆはたて。）
65 一、
66 かやうのうたひやうの習とも余多御入候得共、心同前ニ候。序破急一色、能御稽古可有之候。
67 一、序破急。是ハ、のへたる跡ハひろいて、謡ひろいて謡たる所ハのへて謡候事ニ候。又、地のほと候て、拍子の間を謡候て行事も有。たけたる位にてなく候へハ、難成覚申候。
68 一、文字うつり。是ハ何にても字を引候へハ、跡ニ一字つゝ字をうむ物ニて候。らの字を引候へハ、あの字てき申候。譬ハ「淋（野宮）しき道すから秋の悲しミ」と云所、らの字を引、あの字いふに不及、きの字うつり申候か文字移りニて候。
69 一、めはせ（うつくしく、少よわく、ゐんなり。）
70 一、おはせ（あらめにつよく、やう也。はる。）
71 つき出す謡一番の内にて、めはかせ・おはかせ、御入候。譬ハ「酒（千手）ゐんのやめ（ぐこ）給ふ御心のうちそいたわしき」と云所は、女はかせ也。「かくて重衡ちよくにより」と云所ハ、男はかせ也。いつれの謡も同前。諷ハそれ〳〵の外題のことに謡（脱カく）候へハ、上手ニ而候。心持・謡の位は御稽古ニ不及、観世宗節申ト承候。たとへハ、定家ならハ式子内親王の位を分別して、位たかく、うつくしく御謡可有候。又、江口ならハ遊女の位を分別して位もなく、そさうニ御諷可有候。葵の上なとハ上臈にて候へ共、うハなりうちニ而しんゐのほむらをもやし候やうニ作り候間、美しき内にもつよくかとらしく御謡可有候。しゆらなとハ一番の内にても、初ハ老人或ハ草刈に成候て出候間、其姿の位に御謡可有候。後の出端より必むかしの有様をあらハし、武士に出立候て出申候間、其位ニつよくあらめに御うたひ可有候。夫〳〵に作り置候間、其句面のことくに、かるめる位にて御謡可有候。百番・千番も右の心得たるへく候。
72 一、シテトワキトツレとの心得。シテの方ハふくませて、しよんほりとおしひらかすして謡ふへし。又、ワキの方ハいかにもつき出し、さらりとおしひらきうたふへし。ツレハおしひらきもせす、しよんほりともせす、何となく謡ふへし。一番のうたひを一人して謡候時ハ、三色に諷わけ候物ニて候。何れもシテの方ハ、美しく位をあらしてうたふへし。ねはくハ悪かるへし。ワキ方ハ位もなく、さらりと御謡ひ有へく候は、やく悪かるへく候。両方共ニ軽キ心得、専一ニ候。
音曲ハかろき心によかりけるおもきもわろしたるきもうし。
73 一、シテトワキト問答のうち、地へ渡し様の心得。前半分はワキノ位、後半分ハ地の位を取てうたひ、地へわたす事、習にて候。

74 一、助音するハ、我をわすれて人に随ふへし。さるにより耳にてうたふとあり。寄合て諷ん時ハ其中に初心の物ハ耳を明へし。
皆人のつよくうたわん其時ハ声をやすめて又うたふへし。

75 一、めるハはる。是ハ声をめりてひきく謡候処ハ、心をはりてよし。

76 一、はるハめる。是ハ声をはり候て高ク謡候処ハ、心をめり候てよし。

77 一、君臣のやく。一小(ママ)謡ハうたひ君ニ而候。鼓ハ臣成によりて、うかゝひて打申候。

78 一、曲舞ハ鼓君ニ而、謡、臣なるにより伺てうたひ申候。

79 一、何の謡ニても其位より三所、かろき所あり。ろんき後、くりの前さし。

80 一、ろんき・もんたい、いさかいのことく、初は静にいひあひ候へ共、後程気を上ケ候て、まけしとつめてからかひ申候。其如論義も後程(ッ、脱カ)めて謡候物ニて候より、その跡かろく候。
ろんきこそやすく聞えて大事なれ問に答ふる程をしらすや。

81 一、くりの前、くりハつゝミのかゝり候て打申ニより、前の謡おもく候へは、くりうたわれ申されす候。かろくうたふものニて候。

82 一、さしのらぬハ、さし声のるハ、さしこと此二通りハ似たる事ニて候得共、謡やう違ひ申ニより打様も替り申候。さしハ、君臣のやくはつれたる所ニて、つゝミも謡と思ひ合不申ニより軽ク候。乍去、さしにあふとあわぬとの打様御入候。打候人、稀ニ而候。一ちやう鼓時ハ、又打様かわり申候。

83 一、さしの謡出し。鼓打上候て、小鼓まておとし候て、其儘謡申候。立曲舞ハくりのゆり、少あまる程に、はやく打上候てうたハせ候。居曲舞ハ、鼓をうたひより一段も心得有へし。

84 一、曲舞のだし。鼓、かんにてうたわせ候へハ、声を懸申候。おつにてうたハせ候へハ、声かけ不申候。乙にてハ手に成申ニより、かけ不申候。油断なく声にかまハすうたひ出し候事、専一ニ候なり。

85 一、曲舞を序破急ト三ツに諷分候。くせまいの出しより句相迄ハ序、句相より上ケは迄破、上ケはより後ハ急にうたふへし。

86 一、上ケ端にしやうねといふ事有。

87 一、太夫、後、てはの謡様。めはかせハ小鼓の順よりうたひ出シ申候。おはかせハ、大つゝミの順より謡出シ申候。笛を聞つくろい諷へし。又太鼓にての時ハ、心得替り申候。一ちやう大鼓の時は、また心得替り申候。

88 一、諷のこしおれ。是ハ出端の一せい打上候て、必ワキ謡ひ申候。鼓の少内よりかけて、つゝけて御謡候程おき候て謡候を腰折ト申候。余内からハあしく候。

89 一、くりのゆりの事。ワキ能ハ八ツ、「花初てひらく」。
但九ツ共十ヲ共申候。半ゆり、四ツにて候間、八ツに
て可然候哉。

90 一、かつら能ハ、七ツ。「露の世話よしそなき」〈定家〉。

91 一、太夫一人ゆり候ハ、五ツ。則「当寺〈田村〉の仏力也」。此
太夫のゆり、秘事ニ仕候。存たる人、稀ニ候。

92 一、半ゆりハ、四ツ。「楚班〈タ顔〉の竹を染るとかや」。

93 一、謡をつなくと云事有。大秘事にて候。仮ハ「今〈高砂〉を始
めの旅衣、高砂や此浦船に、然は此松ハ、然るに長能
か詞にも」、「山〈定家〉より出る北時雨、今ハ玉の緒よたへな
ハたへねなからへは、哀しれえも（しカ）」同し。「その外〈三井寺〉爰
にもよゝの人」、木に竹をつくと云候て、位違候を何
よりあしき事ニ仕候。おの山鐘（松の山鏡カ）、唯一番、木に竹を次
と謡候。ならいにて候。

94 一、いきつき。一さし・一曲舞・一きり、三所なから替
り申候。一大事の物にて候。いきつき悪敷候へハ、謡
むさく、何としても、したるきものにて候。てにおは
のにて次へし。人にしらせぬやうに次へし。

95 一、さしハ、額にて声をきる。

96 一、曲舞ハ、出ル息にて謡おさめ、入息ニて謡出し、又、
腎（シン）のざうニ而うたひ治メ、肺の臓ニ而謡出シ申候心、
同前ニ而候。二字つめとて、句きりのいひはなしを二
字つゝつめ申候。いひはなしにてつめられぬ所ハ、い
ひ出シを二字つめ申候。此心得、専ニ候。又、舌のあ
つかいに習も御入候。又、鼻ニていきを切習も御座候。

97 一、力道（チカラミチ）、現在の鬼。口をふさきたるおもて也。さらり
と謡ふへし。

98 一、細道（ホソ）。神鬼とて口を明たる面也。細かにうきやかに
諷ふへし。

99 一、大口着たる僧ハ、住僧・座主・法印也。是をハしん
におもくと謡ふへし。おきつゝミあり。

100 一、大口きぬ僧ハうつを僧とて、常の僧也。そさうにさ
らりと謡ふへし。おき鼓なし。若、打候へハ麁相ニ打
也。

101 一、五音。是をよく〳〵不知候へハ、謡にてハなきと申
候。委御執心なくてハ難成事にて候。

102 一、祝言。年の初、千秋萬歳とよろこふ心得。哥に、
春日野に若菜摘つゝ萬代をいわふ心ハ神そしるらん。
金札の小謡。亦何れ脇能の曲舞ニ而も御稽古可有候。

103 一、幽玄。遊玄共書、心得可有候。三井寺の小謡、曲舞
ニ而も。
有明のつれなく見えし別より暁はかりうきものハな
し。

104 一、恋慕。人に打もたれ、なつかしきこゝろへ（花筐の小うた 班女の曲舞ニ）
而も（ひ）。
立出て爪木をひろふ片岡の深き山路を成にけるかな。

105 一、哀傷。一切よはし。角田川の小謡、せうきの曲舞に

ても。

浅茅生や袖に朽にし秋の霜わすれぬ夢を吹あらしかな。

106 一、闌曲。四音、思ひの儘ニ成就云也。哥占の小謡、隠岐院の曲舞ニ而も御稽古可有候。

いつしかに神さひにけり香久山のむすきかもとに苺のむすまて。

107 謡一番の内、幾所も五音に先引切て頭より諷出ハ、無祝言と心得へし。如右小謡一ッ宛ハ、ミな御稽古候て御謡候へ共、一番の内、所〻五音諷わけ候人、稀ニ候。五色ニ諷分候ハ、ふしにも文句にもよらす候。心かハりめにて声迄替り、人の耳へ五色ニ聞へ申候。祝言の心持、はつれてハ悪敷候。祝言の心持上に、声に色をつくるとつけさるとの違候て候。哀傷ハ、御祝言の心はなれ申候。闌曲ハ右ニ申ことく、同曲成就して打よせて謡候ニより、乱曲(ママ)は書申候。引歌・たとへなと数多云置候得共、いかほと見申ても合点不参物ニて候。小謡一ッと(をカ)五色ニ声をかへて諷分る人ニハ、稽古可有候。一度にて合点可参候。当代、左様ニハ謡分候人、稀ニ候。祝言を不祝言に御謡候衆はかりにて候。

108 一、一ちやう鼓にて、一人謡候心得。先、小謡を序より諷物にて候。扨なかくと所望の時、さしより曲舞を謡候。曲舞斗ハ諷ぬ事、さしと曲舞との間ニ心得有故か。二ちやうの間を一ちやうにてふさき候間、常の謡よりかろく諷申候。扨、序破急・程拍子・地のほとを能謡候人、上手ニて候。笛、御入候事有。舞過て打上て、うたわせ候。打上やうニ習あり。謡手も此打様不知候へハ、悪敷候。御稽古、尤ニ候。

109 一、かろき字ハ、ちいさかるへし。

110 一、おもき字ハ、大なへし。(る、脱カ)

111 一、つよく当り、強ク入へし。

112 一、かろく出すへし。

113 一、とたかの三字ハ、皆きめてよし。

114 一、へうの二字ハ美敷、よハかるへし。

115 一、引ニハ、能程らい可有之。

116 一、声をつかふ事。宵ニハ、物数多ク、たかく諷ふへし。暁ハ、ひきく少く諷ふへし。但、おかんと思ふ時、たかく諷ふへし。扨、あつき湯を呑へし。声のむきたるとうたいからさぬやうに、すかして諷ふへし。声つまりたる時ハ、つを呑へし。何より薬なり。暁に限るへからすつかふこゑ常にうたひを謡ふへきなり。

117 一、鼓よりうたひそこなハせんとて、手を打かくる(ヘカ)時の心得。本の地ニ心を付て、筋を忘るへからす。第一、いつくにてか、珍敷打候ハんと油断なく心を付へし。我、拍子をつよくして、相手の拍子をうかゝわぬかちかハぬ極意ニ而候。うかふ(ママ)ニよつて皆違申候。右ニ曲を忘れて拍子を知れと書候は、爰の子細ニて候。またかろき事ニて候。

いさうなる手を打かけハとりあわてすくに行へき地を忘るなよ。

118 一、謡より、つゝミを打そこなわする心得有。うたぬ拍子ニ能〻心を付て身の拍子を沢山ニ諷候へハ、必鼓違申候物ニて候。又諷返しニ而候ハ、金剛返しとて、必打そこなハする習有。皆〻不入事ニて候得共、書附申候。

119 一、舞のはて、鼓打上すにわかす(ママ)諷申候。鼓忘候て打上候事有。譬ハ、安宅ならは「なるハ(安宅)瀧の水」をうたハすに、「日ハ照るともたえすとうたる(ママ)」とうたひ出ス物ニて候。夕顔の舞なと鼓忘れて、おとわすにかし(さか)らにて打上ル事有。夫も「御僧(夕顔)の今のとふらひを請て数〳〵嬉しや」と、後返しより諷物にて候。かやうの所、何れも同前。

120 一、先、拍子のおこりは、昔有人、脈のおとるニて心付、是ニ而萬の拍子作り出したると申伝候。

121 一、よひやうや(ママ)拍子。此二ツ、能、脇と地と心得あり。

122 一、五拍子身の指子。手のひやうし。はやし。心ひやうし口ひやうし。足ひやうし。　是五ツなり。

123 一、七拍子かろし。おそし。中したるし。しつか。　七ツなり。

124 右の拍子共ハ皆拍子のつもりして、常にうたわぬ拍子ニて候。初心の人ハ、御習候ても合点参兼候事ニて候。謡上手ニ成、自由に諷んと思召候時ハ、右の拍子つもり不存候へハ不成候。是より打ひやうし。

125 一、本の拍子。初てつくるニ、諷につゝミ付候時入候。何ニ打候而も合申候。人の合点の行ぬ様ニ打物にて候。

126 一、拍子、句切ニ有。細なる能拍子ニ而候。又、一拍子つとめて、小謡のすへを何れの拍子ニ而出候処も、一拍子ニて謡事有。又、すみの拍子ハ、ひやうちやうかへりにあり。

127 一、二拍子。此拍子、扇子拍子ニハ余り、不入ひやうしニて候。

128 一、三拍子。是、扇拍子ニハ余り打不申候。鼓、不断打申候。此二拍子・三拍子ハ、謡の跡をはやすと云事ニ打申候。流によりせんさく有事ニ候。一ちやう鼓の時、専に用申候。秘事ニ出候事ニ候。

129 一、四拍子。大鼓と小鼓との間に四ツ打申候。是、ぬるき拍子ニ而、八拍子の間を一ツ宛ぬきて打申候。

130 一、五拍子。諷切候処ニ、専ニ打申候。曲舞の内ニも打申候。七ツ拍子を二ツぬきて打申候。諷きりに此拍子を鼓ニ而打申候処有。朝長・海士、其外仕候も有。不心得ニ候へハ違申候。

131 一、六ツ拍子。此ひやうしハ、扇子拍子第一、能拍子ニ而候。七ツ拍子を一ツぬきてうち申候。

132 一、七ツ拍子。八ひやうしを一ツたらすに打申候。ひつとりニ而ハ、六ツ拍子をませ不申候へハゆき不申候間、あまり能キひやうしニてなく候。

133 一、打八拍子、是ハ、わか・きりニ専用申候。はやきと

おそきとの打様ニ而も、何れの所にても打申候。人により打やう違候得共、打切・謡出しの五拍子。

〈通盛〉龍女のへんしやう
〈江口？〉紅花の春朝
〈熊野〉清水寺の鐘の声
〈采女〉かつらぎの大君
〈楊貴妃〉我もそのかミハ

134 とのたんのたん
かかかかニ
けけ〻〻〻
〻〻拍拍拍
拍程子子子
子　程

右の拍子共、かやうにこまやかに存候人、当代可有候。かやうの拍子共、能〻存候而より謡かひやうしニはなれ、程を行、かろく自由ニ可有候。拍子のつもり打様を不存候而謡上手ニ御成候事、努〻有間敷候。諷、器用ニ而拍子つよき人、能様ニ謡のしやうねおもく候て、うハかわはやきにより程をやくに立不申候。仮令、うハかわあい候ても、かんにたへ、面白事も聞事なる儀もなき物ニ而候。いかやうの上手鼓を打も、下手の諷か足まとひ（ママ）に成候て、先〻、行不申候て、あい不申候物ニ而候得共、左様ニ而思ひ合不申物と道つれをつれ候心にて、面白もなき事ニて候。又、用捨なしに上手か打も謡も仕候得は、一切あい不申物にて候。

ふミあてハ目くらもへひもおちつへしらぬハやすき和哥の道かな。

135 此道、すきなき人ハかやうに書附候を御覧しても心付不申、却而おかしく思召へく候。御数奇の旁は能〻御稽古候て、面白御諷、尤候。善悪を存候而からハ、むつかしき事ニ而も心をつくし、御稽古なくてハなりかたく候。

136 一、謡手も鼓のうちやう不存候而ハ、成不申候。あまた御入候。凡大事分、書附申候。

137 一、上り僧・下り僧。是ハ定家と江口と二番に限りたるにて候。次第ニ習御入候て、脇出候時のかしら定り申候。夫を聞候て、脇出申候。わきをいつ出し候ハんも鼓の儘にて候。

138 一、脇能の次第ニ、五段の次第・七段の次第とて御入候。是に、しん・さう有。又、てかしら御入候而、其頭より打申候迄ハ、脇出不申候。一れゐ、わきかいこ、脇の鼓の打様。

139 一、大かへし。鳥追に「打鼓」と云所、花筐に「おもしろや」と云処、又柏崎に「たのもしや」と云所。

140 一、正尊の紀（ママ）請のうちやう。

141 一、木曽の願書の打様。

142 一、安宅の勧進帳のうちやう。

143 右の三番、三ツの読ものとて、行やうむつかしき事ニ候。

144 一、松風の羽の舞ニ、もんのとめの打様。

145 一、項羽。「りよはとうハ、恐れテ不近」と云処。

146 一、闌曲のうちやう。右の外ニもあまた御入候得共、大方の大事ニ仕候而教へ不申分、書付申候。りくとうニいはく、一犬かけをほゆれは、万犬声をあやまる。一師本くらけれは、万弟子道に迷ふと有。師匠一人悪けれは、弟子皆悪敷候。能キ師匠、御稽古尤に候。心得て可然哥、少々書附申候。

147 師匠にも問すハいかて教ゆへき心をくたき念比にとへ。

するはきと(ママ)問ふを恥とやおもふらん問ぬハつゐの恥とこそきけ。

音曲をきハむるほとの者なりと猶奥ふかき事を案せよ。

人ことをわろく云なす心得ハ我身のあたになるをしらすや。

兎に角に指をさしつゝ笑ふとも道を嗜む事をのミしれ。

上手こそ物きらいする事そなきやうかましきハ下手のくせなり。

嗜まん人とハかたを当世(ママ)は物しりたてと笑ふなりけり。

下手こそハ上手の上のかさりなれ何とわろくとそしりはしすな。

148 其人の弟子といひたる斗にてなさぬ稽古に師はし恨(の、脱カ)むる。

扨、謡から(ママ)肝要にて候。よつ一ツのいきと云事有。段よき事ニ而候。

諷ひ出す心を何と持ぬらんしうにものいふこゝろ成へし。

うたひ出す声をハ何と思ふらん鶯の啼こゑのことくに。

149 何こころなくふつと諷候ニよりつきもなく声(ママ)出候て、謡必悪敷候。一調・二気・三声といふ事有。調子分別して気にあてゝ、息を呑入て声を出すへし。序の二字とて諷出候。初の二字、軽クよせて謡候へハ、したるき事なし。謡の秘事ハ、工夫にて候。

何事も工夫にまさる事あらし習の上にくふふ(ママ)なりけり。

如何程稽古候ても、常に工夫をして御諷なく候ハ、心はかりは行候とも、ロニハ行ましく候。にたる事のにぬ事ニ而候ハんあいた、御分別候て御謡肝要ニ而候。

程拍子と云事、其程の心はえもいわぬところ、本来面目成といへは、誠此道成就の人、聖開得道すへき者也。

150 一、拍子合の事。本の頭。ハヲハヤヲハ●ハヤヲハ・●ヤヲハ●上略●●ヤヲハヤ●中略●ヤヲハヤ●下略●ハ●ヲハ●

151 一、大かへし。鳥追「打つゝミ」。花形見「おそろしや」。柏崎「たのもしや」●●●●。●○●。「たのもしや」●ヤハヤヲハヤエイ●●●●●ヤヲハヤヤヲハ。「たのもしや」●ヤハヤヲハヤニイ●●●ヤ●○○●●。右のうちき

り、その流々に秘して教へ不申ニより、今ハかやうには打申さす候へ共、若、存候而打候人候得は、うたひ出かね申候間、書しるし申候。

152

一、つゝミを聞て謡候ニより、諷下手に聞え申候。心拍子にて鼓かまはすさら〳〵とうたひ候へハ、如何様の上手の鼓打も謡をうかゝひてうち申候により、鼓下手に聞え申候。秘事ハまつけのことく、是うたひ手の一の秘事にて候。小つゝミ一ちやうの時、笛御入候事有。其時ハ小鼓打上申候。打上候て跡に、●ニ●◉●。（ヤチチタホホヤ）かやうに打申候。●ニ●。○○●。（ヤチチタツホホヤ）かやうにうち申候。

153

扨和哥をひつ付て、うたひ出し候。大方右の分、御稽古候て、すミ申事ニ而候。謡ニハ、つゝミのやうに定りたる習ひはおほえ無之候也。

右之外、ツレテ出ス曲舞の拍子合、数多御座候得とも、書ニ不有暇候間、略之者也。

右之條々、覚違聞ちかひも可有候得共、諸人の嘲りをも不恥、書附申候、併、一色も私に作候而書附事、努々無之候。古人の書物共を以、垣田又右衛門其外方々致執心候而、相尋口伝受候通少も無他言、書あかし申候。更〳〵御他見有間舗者也。

以上。

此書、当国武田大膳大夫殿一人相伝の旨（ママ）より外、有之間敷候。観世家之秘密之書也。

日吉弥右衛門権守空庵入道

寛文五乙巳卯月日

（後筆）
〈雲林院〉
「ケニヱタヲヲシムハ」、カケヨリ出ル。
〈定家〉
「ヲモンナノマイ」ハ、ヒヤヒヤウリ、ヒヤリウリニ付ル。アルイハ、ヒヤヒヤウリ、ヒヤリウリイニ付ル。
〈鞍馬天狗？〉
「ミル人モナキ」ハ、カケヨリ出ル。〈朝長？〉「サシセ（シカ）十方ハ」、カケヨリ出ル。
〈安宅〉
「クワスシン帳」、カケヨリ出ル。
遊行柳、「わか聖人」よりも合スル。又「ウゲ（ママ）ヨロコブ」ヨリモ合スル。

（裏見返）
汗にぬれし人斗なり蟬時雨　柔水

此君園　知常済蔵